共創　Vol. 1 pp. 106～108, March, 2023

実践報告

高大連携による英語科教育の開発
－2022年度の実践報告－

田口 達也*　平岩 加寿子**　宮本 真衣**　有本 明日翔**　石鍋 圭一**
加古 久光**　川上 佳則**

*外国語教育講座
**附属高等学校

Ⅰ　はじめに

2020年に愛知教育大学では学部改組が行われ、外国語教育講座関連では、従来の「初等教育教員養成課程」（英語選修）と「中等教育教員養成課程」（英語専攻）が「義務教育専攻」と「高等学校教育専攻」（ともに英語専修）に変更となった。改組前は、初等・中等教育ともに単位数を満たせば、**表１**にあるように、３校種の教員免許状が取得可能であった。しかし改組後は、義務教育専攻では３校種の免許状取得は可能だが、高等学校教育専攻では、小学校教員免許状の取得が不可となる。初等教員養成のための授業を履修する必要がなくなった代わりに、中等教育、特に高校教員養成に向けての専門性を高める授業がより必要となったということである。専門性を高める授業の一つとして、大学附属高等学校と連携した授業の取り組みがある。

表１　改組前・後の取得可能教員免許状[1]

	課程／専攻	小学校一種	中学校二種／一種	高校一種
改組前	初等	◎	◎／○	△
	中等	○	－／◎	◎
改組後	義務	◎	◎／○	△
	高校	×	－／○	◎

注．◎＝卒業要件、○＝取得推奨、△＝取得可能、×＝取得不可

愛知教育大学と愛知教育大学附属高等学校は、同じキャンパス内にある。こうした教育機関は全国には多くはないであろう。この地理的近さが新たな高大連携の利点にもなる。その一つに、大学生が附属高校を頻繁に訪問でき、高校教員養成に向けた学びの経験を得られる点がある。本稿では2022年度に実施した、愛知教育大学外国語教育講座と愛知教育大学附属高等学校英語科との連携による英語科教育の授業開発の取り組みを紹介する。

Ⅱ　本連携による2022年度の取り組み

改組により、高等学校教育専攻は2021年度から始まり、2022年度は「英語科教育演習Ⅱ」（前期）と「英語科教育演習Ⅲ」（後期）が開設された（担当：田口達也）[2]。今年度は大学で上記の授業にて英語授業を実践していくための方法について学び、適宜、附属高校の教育活動の観察・参加という形態をとった。今年度に行った連携の取り組みは、**表２**のとおりである。本稿では、それらについて紹介する。本活動には、高等学校教育専攻英語専修２年生17名が参加した。

表２　2022年度の高大連携の取り組み

１．2022年度前期
　⑴　教育実習生の研究授業観察
　⑵　授業観察
　⑶　パフォーマンステスト観察
２．2022年度後期
　⑴　授業参加
　⑵　プレゼンテーション評価実習
　⑶　授業実践

１　2022年度前期の取り組み

⑴　教育実習生の研究授業観察

附属高校英語科は、今年度は２名の教育実習生を受入れ指導を行った。この活動では、実習生の研究授業を附属高校と大学間をZoomでつなぎ観察した。２名の実習生は「英語科教育演習Ⅱ」受講生の直接の先輩にあた

り、受講生にとってのニアピア・ロールモデル（Near-peer role model）になるため、研究授業の観察が受講生によい刺激になることを期待しての活動であった。

⑵　授業観察

次に行った活動は、高校の通常授業の観察であった。本授業は高校生が英語でＥメールを書けるようになることを目指した内容であり、次の⑶のパフォーマンステスト観察と並行して行われた。参加した大学生の高校在学時と比べると、内容自体は大きく変わっていないかもしれないが、実際にタブレットを使用してＥメールを書いて送るという点で、「より実践的な内容になっている」と感じた受講生もいた。

⑶　パフォーマンステスト観察

今回は、生徒による音読のパフォーマンステストの現場を観察した。生徒が授業等を通して身につけた英語力の評価の場を観察するのは、教師と生徒という当事者以外ではあまりないであろう。高校在学時にパフォーマンステストを経験しなかった大学生もいれば、経験したものの評価方法が分からず不安を感じた大学生もいた。一方、今回の観察では評価基準が示されていたため、評価方法に興味を持った大学生もいた。

２　2022年度後期の取り組み

⑴　授業参加

後期最初の活動として、附属高校の英語授業に大学生が参加し、高校生のグループ作業中に英語指導を行った。具体的には、生徒がプレゼンテーションする内容について事前に発表原稿を作成し、それについて大学生が添削し発表の仕方についてアドバイスを与えるというものである。この活動については大きな学びを得たようで、添削の仕方、アドバイスの与え方、指導のための英語力について、更なる向上の必要を感じた大学生が多く、実りの多い活動であった。

⑵　プレゼンテーション評価実習

「評価」学習の一環として、生徒による実際のプレゼンテーションを模擬的に評価する活動を行った。実習前には、主観テストの評価を行う際に起こる問題点と改善方法について、評価者信頼性の内容を踏まえて学習を行った。実際の評価を行う際には、基準となるルーブリックがあるため、評価者間信頼性について学ぶ前と比べ、評価者間のブレ幅は小さくなったようであるが、評価者間の評定の違いが大きい場合は適宜相談し評点を決めた。主観テスト評価の難しさを体験できる活動であった。

⑶　授業実践

今年度最後の活動として、高校生に対して実際に授業を行った。参加大学生を２グループに分け、グループ単位で授業者を選び、リスニングについての授業方法を考え授業を行うというものであった。約30人の生徒を前に授業を行うため、大学で２回模擬授業を行い、本番に備えた。模擬授業では生徒役がなじみのある大学生で、かつ英語力もあるためうまくいく場合でも、実際の授業ではうまくいかない場合が多々ある。模擬授業の経験を経て改善を行い、高校生に対してより良い授業ができたのではないだろうか。

Ⅲ　次年度に向けて

本連携の「元年」である2022年度は試行錯誤の連続であった。しかし、冒頭でも述べたように、両校が同じキャンパス内にあるという地理的利点と附属校という関係から、少しは実践的な英語科教育の開発が行えたのではないだろうか。一方で、上記の取り組みから今後の課題も見えてきたので、次年度は、対象大学生の学年にもよるが、それらの課題を踏まえてより連携した活動にしたい。

次年度の課題としては、主に三つ挙げられる。一つ目は、教育実践力のさらなる育成である。今年度の連携では、授業観察と生徒の

学習活動への参加が主たる活動であり、実際の授業を行ったのは一部の大学生にとどまった。大学での模擬授業を含め、これらの活動は教員養成の大事な一過程であるが、対面で大人数の生徒に対して行う実際の授業とは異なる。附属高校との連携をより一層強めた活動が必要となる。授業実践に関して言えば、本専攻英語専修３年生は後期開始前に高校での教育実習を予定しており、それに向けての準備が必要となる。一方で、彼らは2023年度前期に「英語科教育Ⅳ」を、後期に「英語教育実践」を履修する。これらの連携授業によって、教育実習が最終目標ではなく通過点となり、より高度な授業実践力の養成が期待される。

二つ目は、英語学、英語圏文学、異文化理解といった内容学的視点を組み込んだ英語科教育の授業開発である。英語を教えるためには、単に教え方を身につけるだけでは不十分である。言葉としての英語の特徴等を理解することと、話者・筆者の考えの理解を促し自身の考えを育むことも必要である。高校の学習事項把握に加えて、内容学的視点から、学習内容に焦点を当てた教材研究についての高大連携を行うことにより、高校教員養成に相応しい専門性の高い教育を提供できるであろう。

三つ目は、高校の英語教員としてふさわしい、４技能に関する高い英語力の育成である。今年度の生徒への英語指導活動を経て、確固とした英語力の必要性を認識した大学生が多かった。大学での普段の授業においても、そうした高度な英語力を育む必要がある。

上記の課題に取り組むことで、次年度は今年度よりも進化した形で、高大連携による英語科教育の開発ができると期待している。

注

１　英語専修における状況である。

２　「英語科教育演習Ⅰ」という科目も開設されているが、１年生を対象に、大学で英語教育の理論的支柱として第二言語習得の理論を学ぶ授業のため、本稿では取り上げない。